イギリス滞在記 ⑦
ケルト展は何を問いかけるのか？

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

大英博物館のケルト展

３月末、イギリスでの半年間の滞在を終えて帰国した日本は春爛漫で、奈良ではちょうど桜が満開を迎えている。現地からは離れたが、今少し、滞在記を続けたい。何度も足を運んだ大英博物館でとりわけ興味深かったのは、折しも開催されていた特別展『ケルト：アートとアイデンティー』だった。紀元前 500 年から現代まで、2,500 年にわたる「ケルト美術」の作品が総合的に取り上げられたのは今回が初めての試みらしい。

世界各国からの観光客で賑やかな常設展示室とは違って、特別展の会場は、地元市民の姿が多く、皆、熱心に見学をしているのが印象的だった。時代や地域、分野を超えて集められた各作品がもつメッセージ性の強さには、私も圧倒され、今でも見学後の余韻が残っているほどだ。洗練された展示全体を通して問いかけられたのは、ケルトとは何かという問題で、伝統的な考え方とは異なる今日的な理解が提示された。

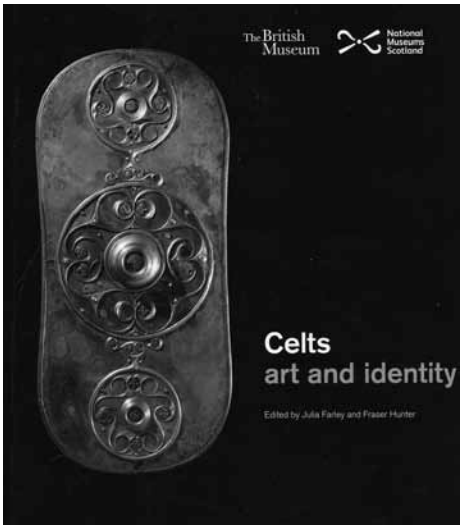
展示の解説によれば、ケルトについての概略は次のようだ。紀元前 450 年頃、古代ギリシャ人の歴史家ヘロドトスは、ドナウ川周辺とイベリア半島南西部に住む人々をさす曖昧な概念として、ケルトという言葉をはじめて用いた。その場合のケルトとは、アルプス以北の大陸ヨーロッパの一部に住む人たちを指し、ブリテン島やアイルランドに住む人々は視野になく、また、古代ギリシャからケルトと呼ばれた人々自身は、自らの記録を文字で残さなかった。

一方、現代において、ケルトの語から想起されるのは、いわゆる「ケルト国家」、すなわち、スコットランド、アイルランド、ウェールズ、コーンウォール、マン島、ブルターニュといった地域の特徴的な文化だ。ブリテン島を対象とした遺伝子の研究によれば、17 のクラスターが認められ、イングランドとそれ以外の地域ではクラスターのまとまりに違いが認められるともいう。しかし、ケルトとされる上記の各地域には単一の歴史はなく、共通点があるとすれば、ローマの強力な支配や影響から免れたこと、そして、４世紀以降におけるアングロ・サクソンの領域に入らなかったことくらいだ。重要なのは、過去数百年の間に、ケルトという言葉が再定義され、現代のケルト国家の人々にとって、音楽、ダンス、言語、信仰、態度など、ケルト的であることが、イングランドやフランスとは異なる自らのアイデンティティーを表明する手段になっていることだ。

ケルトの再発見と創造

ローマ期以降、ケルトという言葉は忘れ去られていたが、ルネッサンス期に修道院の古典文献から再発見され、新たなまなざしが向けられるようになる。

17 ～ 18 世紀には、啓蒙主義の時代の学者たちが、新しく統一されたブリテン島の周縁部で話されている言語の類似点を認め、ヨーロッパで広く話されていた共通の祖語があったとして、これをケルト語と呼ぶようになった。ヨーロッパの東から西へとケルト民族が移動をしたという考えも生まれ、ブリテン島やアイルランドに残る古代の遺跡や遺物がケルトの所産だとみなされた。たとえば、エイベリーやストーンヘンジのようなモニュメントは、古典時代の著者たちがドルイドと呼んだ神秘的な司祭者に関連づけられ、ケルトの神殿だと考えられた。こうして、大衆の想像力がかき立てられ、ロマン主義的なケルト像が生み出されることになる。



大英博物館の『ケルト』展図録

19 世紀の半ばには、組紐文やアイルランドの初期キリスト教美術がケルトの美術と認定され、同時に、それと似た風変わりな装飾をもつ古代遺物もまた、ケルト美術と呼ばれるようになる。とくに鉄器時代のケルト美術は大陸にまで広がることが確認され、古代における共通の祖語を追求する言語からの研究とも合わせ、伝統的な理解の仕方が形作られた。つまり、紀元前 500 ～ 200 年頃、ヨーロッパで広く始まったケルト美術が、紀元前の最後の数世紀にはブリテン島とアイルランドに閉じ込められ、ローマ支配下では沈潜していたのが、中世初期、いわゆる暗黒時代のアイルランドとスコットランドで再出現して保存され、現代のケルト国家による再生に至ったという考え方だ。

しかし、それとは異なる特別展の考え方、つまり、複数形のケルト美術という理解によれば、ケルトの美術には単一の歴史やスタイルはなく、共通点はあるにしても、相違点が多く、鉄器時代のケルト美術と中世初期のケルト美術は全く異なったものだ。紀元前５世紀には、ギリシャ文化との接触によって、そして、紀元１世紀にはローマの征服を通して、さらに、７世紀にはアングロ・サクソン社会のキリスト教化に伴って、ブリテン島の人々は、さまざまな文化的影響を受けてきた。しかし、これらの地域の美術作品は、共通して、地中海的・自然主義的なモチーフが抽象的な様式へと変容している特徴を持ち、ケルト的とは、地中海に似て非なるもの、非ギリシャ的、非ローマ的、非キリスト教的なものを表しているのだ。そこには、それらの作品を生み出した人々の信仰や世界観、自らの過去についての理解といったものが刻み込まれていて、そのレガシーは、今日、過去の作品にインスピレーションを受けて創造され続けている新たな「ケルト文化」へと受け継がれていることが感じられた。